



Nature Study

自然史博物館ホームページ <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/>

61巻 6号・大阪市立自然史博物館編集・大阪市立自然史博物館友の会発行・



放射管が赤く色づいたベニクラゲ北日本型

村井貴史・久保田 信

ベニクラゲの仲間は、刺胞動物門ヒドロ虫綱花クラゲ目に属する小型のクラゲで、日本では3種いると言われていますが、分類学的な研究は未完成で、現在研究が進められているところです（久保田，2010）。このうち、最も北に分布する北日本型とよばれる種 *Turritopsis* sp. は、生殖腺が鮮やかな赤色を呈し、その他の部分は紅色の眼点を除き色彩が明瞭には見られません。しかし、今回初めて飼育下で、本種の4本の放射管全てが赤く色づく現象を観察したので報告します。

北海道斜里町の沿岸で2013年8月6日に複数個体を採集し、数日後に飼育水槽へ収容しました。水槽はクラゲ類の撮影のために使用しているアクリル製の水槽で、簡単な循環濾過装置を取り付け、水槽内に鉛直方向の回転水流を発生させています。採集地の水温は21℃でしたので、飼育水温は約20℃に保ち、給餌や換水は行いませんでした。採集直後にはどの放射管の赤みにも気づきませんでしたが、8月16日から18日にかけて観察したところ、傘の中を通る放射管が明瞭に赤くなっていました（表紙）。触手の根元付近も色づき、傘の縁に沿って環状に赤みを帯びたように見えました。ここで観察を終了し、標本として固定しました。2014年8月28日にも、上記と同じ場所で本種を採集し、同様の飼育下で8月30日から9月3日にかけて観察したところ、多くの個体

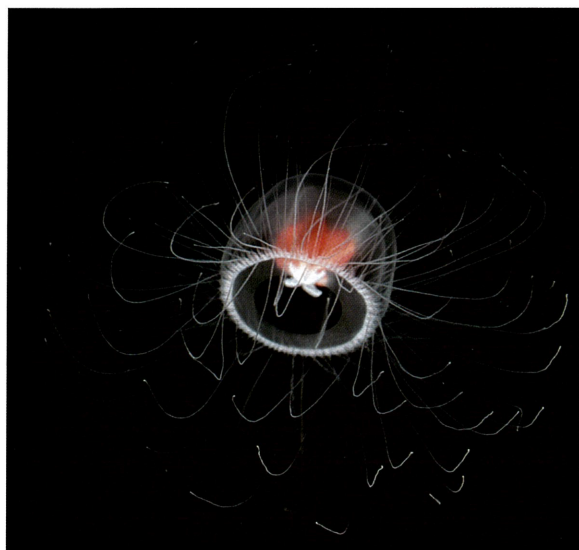
では放射管は赤みを帯びなかったものの（図1：16ページ）、少数個体で赤みを帯びるのが確認できました（以上、村井による観察）。また、福島県産の本種でも同様のことが久保田により観察されています。

このような放射管の色づきは、経時的な変化は正確には観察できていませんが、採集後5日程度の時間が経過してから観察されることから、飼育条件に影響を受けた現象と考えられます。クラゲ類では、捕食した生物の色が一時的に放射管につくことがあります。今回は給餌を行っていないので、餌由来の色ではないでしょう。赤色は生殖腺の色とよく似た色合いであることから、生殖腺の一部が放射管へと流れ出したのではないかと推察されます。触手や傘の動きからは衰弱したようには感じられませんが、無給餌飼育で飢餓状態にあり、個体を維持するために生殖腺の栄養を用いた可能性はあるでしょう。餌不足になってもなんとか生きのびる能力の一端を示すものかもしれません。

<むらい たかし：本会評議員、くぼた しん：京都大学フィールド科学教育研究センター>

引用文献

久保田信（2010）不老不死で若返るベニクラゲ類の生活史．遺伝64(5)：86-92．



左 図1：放射管に色づきが見られないベニクラゲ北日本型。2014年9月1日撮影（採集後3日目）。本文は15ページ。

表紙の写真：放射管の全てと触手の根元が赤く呈色したベニクラゲ北日本型。2013年8月16日撮影（採集後10日目）。15ページの記事を参照。